

資料

先人の生き方を考える道徳科授業の郷土資料の開発

松原 好広

The Development of Local Materials for Moral Education Classes:
Thinking About the Lives of Our Predecessors

MATSUBARA Yoshihiro

要 旨

本稿では、長野県松本市における先人の生き方を考える郷土資料として開発したものである。まずは、地域教材の開発についての有効性を洗い出した。次に、松本市の先人として、「市川量造」と「小松一三夢」の2名の生き方をまとめた。さらに、彼らの高い道徳的価値や失敗、挫折、葛藤体験などを記述し、子どもたちが身近な地域の先人として、彼らの生き方を模倣できるような郷土資料を作成した。

作成した郷土資料は、松本市内の小学校において、道徳科授業で活用している。今後、その有効性を検証していく予定である。

キーワード

先人の生き方を考える 郷土資料の開発 道徳科授業での活用

目 次

I. 問題の所在と研究の目的

II. 研究の方法

III. 郷土資料開発に向けて

IV. ゼミ生との意見交換

V. 研究結果

VI. 今後の課題

引用・参考文献

I. 問題の所在と研究の目的

松本大学は、「地域と一体となった教育活動」を展開している。筆者は、その教育方針の下、昨年度より教育活動に携わっている。そこで、専門である道徳科の実践的な研究を進め、地域を始め、本学に還元できるようにした。

「中学校学習指導要領解説」¹⁾では、「地域教材の開発や活用」について、「地域の先人などを題材とした地域教材を開発と活用する」ことの重要性を規定している。

現在、教育委員会においては、郷土資料を開発しているところもあるが、学校現場までは十分に浸透されていない状況がある。教育現場からも、「子どもにもっと近い教材はないか」「身近なもので使えるものはないか」²⁾などの声も聞かれ、各地域の郷土資料の開発を求める声も上がっている。このようなことから、地域教材の開発を進めていくことは大切なことであると考ええる。

「地域教材開発の手引き」³⁾では、先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材として、児童生徒が感動を覚えるような教材の発掘に努めることが大切であると指摘としている。「感動性」と「リアリティ」のある教材の開発や活用が望まれるところである。

郷土資料の開発について、林⁴⁾は、地域の先人について、児童生徒は、「すごい人」に関心をもつことで、「どんな人間になるか」「どう生きるか」など、人生のモデルを探し求める傾向があると指摘している。地域の先人である「すごい人」とは、児童生徒の心を動かし、自立した人間へと成長させる存在ということだろう。

小林⁵⁾は、地域の先人の成功ばかりに目を奪われるのではなく、孤独感や不安感、覚悟をもって人生を切り拓く姿などに共感を覚えさせることも大切であると指摘している。先人の業績だけでなく、先人の挫折、失敗などの心の内面に迫れるような記述を行うことが大切であるということだろう。また、身近な模範となるとも指摘している。先人は、児童生徒にとって「心の拠り所」となる存在から、生きていく上での目標やゴールとなり、心の成長を促すということだろう。

毛内⁶⁾は、地域の先人について、同じ地域で生まれ育ったからこそ、児童生徒にとって憧れの存在に

なりうると指摘している。地域で暮らし、同じ景色を見て育ったからこそ、先人を扱うことは有効であるということだろう。

以上のことを踏まえ、先人の生き方を考える郷土資料を開発し、それを道徳科授業で活用すれば、児童生徒は、これまで以上に、郷土を愛する心が育まれ、「道徳性の育成」につながるものと考えた。そこで、研究1年目は、「先人の生き方を考え、郷土を愛する心を育てる郷土資料を開発する」ことを研究の目的として、郷土資料の開発を行うことにした。

II. 研究の方法

本研究は、松本市の先人に着目して、郷土資料の開発を進めるものである。郷土資料の開発にあたっては、西⁷⁾の「高い道徳的価値を記述し、児童生徒の生活よりも高い道徳的価値を記述することが望ましい」との指摘から、先人の高い価値観を記述するようにした。

また、井上⁸⁾の「児童生徒に自らの生き方を振り返らせるためには、教材が道徳的価値や徳目を提示する程度では役に立たない」との指摘から、児童生徒が心から共感できるように、先人の失敗、挫折、葛藤体験などを記述することにした。

そこで、松本市のために汗を流し、泥にまみれて、奔走した先人を洗い出すことにした。次に、先人が、どのように地域のために奔走したのかの概要をまとめ、それを筆者のゼミ生と意見交換を行うようにした。そして、そこで出された意見を参考にして、郷土資料を開発した。

III. 郷土資料開発に向けて

筆者は、2名の先人を洗い出した。それが、「市川量造」と「小松一三夢」の2名である。彼らの努力の概要は、以下の文献を参考にして、次のようにまとめた。

1. 「市川量造」⁹⁻¹¹⁾の概要

明治6年、廃城令の交付で松本城は無用の長物となり、廃城となる運命になった。そのような中で、取り壊しに待ったをかけたのが市川量造であった。

量造は、競売で落札された松本城を買い戻すために各地に出かけた。そして、松本城で博覧会を開催すれば、その拝観料でお金を集めることができると考えた。当初、博覧会の開催を許可してくれなかった筑摩県も量造の思いに動かされ、松本城での博覧会での開催を許可してくれた。博覧会は、明治6年から9年まで計5回開催され、天守は取り壊しを免れることとなった。

2. 「小松一三夢」¹²⁻¹⁴⁾の概要

明治35年、伊那市に生まれた小松一三夢は、肺炎を患うなど、長らく療養所で過ごした。昭和22年、松本市の小学校で勤務を始めたが、再び、病に倒れてしまう。闘病生活を終えたであろう小松は、戦後の松本の街が荒れ果てていたのを見て愕然とした。小松は、友人たちと協力して、松本の街を花でいっぱいになろうと考えた。時には、『花いっぱい』ではなく、『腹いっぱい』が必要じゃないかと言われることもあったが、小松は諦めることなく、この運動を続け、多くの人たちの心の中に花を咲かせることとなった。

Ⅳ. ゼミ生との意見交換

以上の概要は、令和4年度の筆者のゼミの時間に、ゼミ生(7名)と意見交換を行うようにした。ゼミ生にとって興味・関心のある郷土資料を開発すれば、小中学校の児童生徒にとっても、興味・関心のある郷土資料になると考えたからである。また、ゼミ生にとっても魅力的な資料となれば、将来、教員になった際、活用してくれると考えたからである。

ここでは、郷土資料を道徳科授業で活用する際、どのような「題名」「発問」が得られるかについて意見交換を行った。

「題名」については、小中学校の児童生徒にとって、受け止めやすく、魅力的で、興味関心を高めるものと考えたからである。また、「発問」については、発問を行う際に資料の記述に工夫ができると考えたからである。ゼミ生たちからは、次のような意見が出された。

1. 「市川量造」の概要から

1)「題名」について

「松本のシンボル」「松本城の存続を守った男」「松本城を守り抜いた男」「松本城直前の取り壊しのお話」「量造と松本城」「今は無くなってしまったかもしれない松本城を陰で支えてくれた人」などの提案がされた。

意見交換では、「市川量造」の名前を入れるか、入れないかについて話し合った。「市川量造」という固有名詞を入れるよりも、「松本城を守り抜いたことを第一に考えさせたい」という意見が多かったことから、「松本城を守り抜いた男」と命名することにした。

2)「発問」について

「存続を訴えるときの量造の気持ちは?」「なぜ量造は、松本城を残そうとしたのか?」「取り壊されそうになったときの松本の人々の気持ちは?」「松本城は人々にとってどんな存在だったのか?」「故郷のために自分ができることは?」などの提案がされた。

意見交換では、松本城が、松本の人々にとって、「どのような存在だったのか?」について話し合った。あるゼミ生から、「量造にとって、松本城は心のシンボルだったと思います。」という意見を聞くことができた。そこで、そのゼミ生に詳しく尋ねたところ、次のように説明してくれた。

松本城は、量造にとっても、松本の人々にとっても「心のシンボル」だったのではないかと思います。松本城は、街の象徴であり、誇りです。一度、失ってしまったら、二度と取り戻すことのできない貴重なものだと考えていたのだと思います。だから、量造は、自分のことよりも人々のことを考えて、全国を奔走し、博覧会の開催にこぎつけたのだと思います。

このように、市川量造が、松本城は人々にとって、「心のシンボル」であり、二度と取り戻すことのできない貴重なものだったからこそ、全国を奔走し、博覧会の開催にこぎつけた姿を記述することにした。

2. 「小松一三夢」の概要から

1) 「題名」について

ゼミ生から、「小松一三夢が見た夢」「人々の心に咲いた花」「花の咲く街」「松本の街を照らす『花いっぱい運動』」「松本の街を明るくする『花いっぱい運動』」「誰かの支えになる」などの意見が出された。

ここでは、題名に、「花いっぱい運動」を入れるか、入れないかについて話し合った。あるゼミ生からは、「花いっぱい運動」を入れるよりも「人々の心の中にも花を咲かせたかったことを入れた方がよい」という意見が多く出された。そこで、「人々の心に咲いた花」と命名することにした。

2) 「発問」について

「小松が病気だったとき、どんなことを考えていたか?」「小松が諦めることなく活動を続けられたのはなぜか?」「小松の夢とは何だろうか?」「小松の運動は、筆者たちにどんな影響を与えているか?」「心の中に花を咲かせているとは、どういうことだろうか?」などの提案がされた。

意見交換では、「なぜ、小松は食べることも花を植えることを選んだのか?」について話し合った。これは、食べることは、生きていくために必要なものであるから、否定されるものではないと考えたからである。あるゼミ生から、「小松自身が花から勇気をもらったのではないか。」という意見を聞くことができた。そこで、そのゼミ生にくわしく尋ねたところ、次のように説明してくれた。

小松が療養中のつらい時期に、花を見ることで花から勇気をもらったのだと思ったからです。その時の思いが、小松の心の支えとなったと思います。食べ物を配るより、小松が、花を植えようとしたのは、食べ物だと人々が奪い合うことをしてしまうのではないかと考えたからです。小松は、療養中、花を眺めることで、花から勇気をもらい、心の中に花を咲かせていたのだと思います。だから、同じように、松本の人々の心にも花を咲かせようと思ったのだと思います。

このように、小松一三夢は、自分が療養しているとき、花から勇気をもらい、心の中に花が咲かせていた思いを、松本の人々にも味わってもらいたいと

いう姿を記述することにした。

V. 研究結果

以上の経緯を経て、次の二つの郷土資料を開発した。資料は、小学生でも分かるように、フリガナをふった。なお、資料中の____部分は、先人の高い道徳的価値観、〰〰部分は、先人の挫折、葛藤体験を記述した。

1. 郷土資料「松本城を守り抜いた男」

松本市のシンボルである松本城は、黒い漆(うるし)で塗られています。江戸時代に建てられたこの城は、その外観から、「烏城(からすじょう)」と呼ばれてきました。

しかし、明治6年に廃城(はいじょう)令が出され、松本城はむだなものとされ、取り壊される運命となります。そのときの様子を、ある市民は、日記にこう書いています。

「やぐらや門が壊され、松かざりもないさびしい元旦だった。」

松本城は、当時のちくま県が、国に取り壊しのうかがい書を提出したところ、「天守を払い下げてもよい」という返事を受けました。そこで、当時225両で売りに出され、松本の市民に落札が決まりました。

しかし、落札した人は、取り壊しの費用が高く、取り壊しをためらっていました。そのような中で、取り壊しに待ったをかけたのが、松本城下の城東に住む市川量造でした。

量造は、自分が関わっている新聞社の紙面に、松本城を残すことを訴えました。そして、松本城を落札した人に、廃城を延期してもらうように頼みました。しかし、量造には、松本城を買い戻すためのお金がありませんでした。

「もし松本城が取り壊されてしまったら、松本の人たちはどんな思いをするのだろうか…。このままにしておけば、やぐらや門だけでなく、天守も壊されてしまう…。」

量造は、思い悩みました。

「どうすれば、天守を買い戻すためのお金を集

められるのか…。」

量造は、天守が取り壊されないよう、京都・大阪・東京などにまで出かけ、寄付を集めに出かけました。そして、当時、人気のあった博覧会が、京都・東京で開催されていることを知りました。そのとき、量造は、あることを考えました。

「もし、松本城で博覧会を開催すれば、多くの人たちが訪れ、その拝観料でお金を集めることができるのではないか…。」

量造は、これしかないと思いました。しかし、ちくま県は、松本城での博覧会の開催を許可してくれませんでした。

「ここで諦めたら、松本城の天守は永遠に姿を消してしまう。何十年、何百年後の人たちは、松本城の天守を見ることができなくなってしまう。」

量造は、諦(あきら)めませんでした。松本城の天守を救うため、ちくま県にこのように訴えました。

「松本城の博覧会は、人々の学びをすすめます。天守を一日見学することは、十年の読書と同じぐらいのものです。それなのに、なぜ、天守を取り壊すのでしょうか。人々のために残したらどうでしょうか。」

やがて、量造の思いはちくま県を動かし、松本城での博覧会の開催を許可してくれました。

明治6年、第1回松本博覧会が開催されました。市民の中には、博覧会を「古びた展示会」などと言って批判する人もいました。しかし、量造は、気にしませんでした。少しでも見学者が来られるようにと、誰でも天守に入れるようにしました。

天守に訪れた人たちは、皆、喜びました。見学者の数も、一日に4～5000人に上りました。城下町も大いににぎわいました。松本城の博覧会は、明治6年から9年まで計5回開催され、天守は取り壊しをまぬがれることになりました。

その後、松本城の外堀は、大正末期から昭和初期にかけて埋め立てられました。現在、その一部を堀に戻す工事が進められています。外堀が完成すれば、これまで以上に、たくさんの観光客が訪れることでしょう。

でも、松本城の天守を見学しているのは観光客だけではありません。空の上からも、市川量造をはじめ、松本城を訪れた多くの人たちが、今も眺(なが)めているのではないのでしょうか。

2. 郷土資料「人々の心の中に咲いた花」

明治35年、伊那市に生まれた小松一三夢は、大正9年に市内の小学校の教員になりました。しかし、肺炎(はいえん)を患(わずら)い、療養(りょうよう)のために千葉県内の療養所(りょうようじょ)で過ごすことになりました。小松は、その療養所で、花を眺(なが)めながら、「人生をどのように生きるか」を考えていました。その後、昭和8年に松本市にやってきましたが、再び病に倒れてしまい、3年間の闘病(とうびょう)生活に入りました。

闘病生活を終えた小松は、終戦を迎えた松本の街を見たとき衝撃(しょうげき)を受けました。それは、松本の街が、すっかり荒れ果てていたためです。戦後、街が荒廃(こうはい)し、人々の心は余裕(よゆう)を持てず、暗(く)くなっていました。そのときの風景は、いつまでも忘れられませんでした。

ある日、荒れ果てた松本の街に、花がいっぱい咲いている夢を見ました。そのときのことを、著書『花をいっぱい』で、こう書いています。

「私はふと、荒れ果てた町に、美しい花がいっぱい咲いている様子を夢に描いてみました。私の住んでいる、日本アルプスの麓(ふもと)、松本の街を花で埋めようと考え、私の胸は少年のように踊りました。『そうだ、花を街に植えることが世の中を明るくする一番良いことだ』と強く感じたのです。」

小松は、居ても立ってもいられなくなりました。頭の中には、いろいろな思いが浮かんできました。

昭和27年、松本で開催される花まつりの日、松本のある食堂に7～8人の友人が集まりました。小松は、友人たちに、こう話しました。

「人は、自分の家の中や庭で花を楽しもうとする。でも、誰もが見ることができるように、街に花を植えたらどうだろう？」

小松の話聞いた友人たちは、「それは、良いかもしれない」と賛成しました。「花いっぱい運動」は、こうして始まりました。

しかし、すぐに最初から順調には進みませんでした。戦後間もなく、食べ物不足している頃だったので、時には、「『花いっぱい運動』ではなく、『腹(はら)いっぱい運動』が必要なんじゃないか」と言わ

れたこともありました。

この言葉は、小松の心に突き刺さりました。人々の心を明るくすることよりも、空腹を満たすことの方が、やるべきことではないかと考えたからです。

「花を植えるよりも、食べ物を確保する方が必要なかもしれない……。でも、食べ物を確保するだけでよいのだろうか…。」

小松の心は大いに揺れました。そんなとき、かつて療養所(りょうようじょ)で、花を眺(なが)めていたときのことを思い出しました。

「あのとき、何とも言えない心地良さがあったな…。」

小松は、食べ物が必要だと思いながらも、それだけでよいのかと考えました。そして、何度も自問自答しました。

小松は、ある決心をしました。それは、根気強く、この運動を続けることでした。保護者や地域の人々にも協力してもらい、小学校の空き地に花の種をまいたり、苗を植えたりしました。この運動は、次第に広がり、松本以外の地域からも問い合わせが来るようになりました。

小松は、当時の機関紙で、このように振り返っています。

「私たちにしたところで別に大した妙案(みょうあん)があって、この運動を大きく育てることができたわけではありません。『花をいっぱい植えましょう。ゴミを片付け、きれいにしましょう』と根気強く触れ回り、種をまいて歩いただけです。」

小松たちが運動を始めてから半世紀が過ぎました。今、「花いっぱい運動」は、全国各地に広がり、多くの人たちの心の中に花を咲かせています。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省,『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』教育出版株式会社, p.103(2018).
- 2) 藤原友和・駒井康弘,「はじめに」『オリジナル地域教材でつくる「本気!」の道徳科授業』小学館, p.8(2022).
- 3) 広島県道徳教育指導資料作成委員会,「教材の開発と活用の創意工夫」『地域教材開発資料』広島県教育委員会, p.9(2010).
- 4) 林敦司,「子どもが心待ちにする道徳科授業をつくる」『道徳教育入門(日本道徳教育学会編)』教育開発研究所, p.185(2008).
- 5) 小林浩之, 日本道徳教育学会神奈川支部紀要,『先人を題材とした教材を活用し、児童が「よりよく生きる喜び」について考えを深め、道徳的な実践意欲と態度を育てる指導のあり方』p.30(2021).
- 6) 毛内嘉威,「文部省・文科省教材、郷土教材の活用」『道徳科重要用語辞典』明治図書出版, p.119(2020).
- 7) 西順一,「資料の条件」『中学校道徳資料と授業』明治図書, p.20(1968).
- 8) 井上次郎,「資料とは何か」『道徳科授業入門』明治図書, p.41(1975).
- 9) 松本市文書館,「市川量造」『松本の歴史を学ぶ一文書館子ども講座一』精美堂印刷株式会社, p.80(2020).
- 10) 原卓也,「松本城天守の保存」『こころの松本』郷土出版社, p.34(2014).
- 11) 中川治雄,「市川量造、天守保存に尽力」『天守で博覧会』『図説 国宝松本城』大日本法令印刷株式会社, pp.184-187(2005).
- 12) 松本市文書館,「小松一三夢」『松本の歴史を学ぶ一文書館子ども講座一』精美堂印刷株式会社, pp.92-93(2020).
- 13) 高橋将人,「心に花をいっぱい咲かせて」『信州 まつもとの戦後50年』郷土出版社, p.112(1995).
- 14) 青木隆幸,「松本市で『第一回花いっぱい世界大会』開催される」『松本・塩尻の昭和史』郷土出版社, p.127(1999).

VI. 今後の課題

作成した郷土資料は、松本市内の小学校において、道徳科授業で活用しているところである。今後、その有効性を検証していく予定である。実践を積み重ね、少しでも客観的に検証できるようにしていくことが課題であるとする。

※なお、本研究は、2022年度松本大学学術研究助成により参考文献を購入した。